

芸亭

うん てい

Nara Prefectural Library and Information Center

奈良県立図書情報館



本の未来

千田 稔

印刷や書籍をめぐる環境が、けたたましく変化している現在、私には懐かしい風景が目に見えぬ。私が生まれ、今も住んでいる地域には、本屋は一軒もなかった。雑誌の発売日に、親からもらった、お金をズホンのポケットに入れ自転車で隣の町の本屋に行く。ある時、私は、そのお金を紛失した。本屋でお目当ての本を手にとった瞬間、ポケットにお金がないではないか。私は大声で泣いた。どなたか知らないが、そのお金をそっと手に握らしていただいた。誰であったか、今も思い出せない。その本屋さん最近、店を閉めたという。ネット販売の時代、生き残ることは、とても無理である。

もう一つ。私は町の印刷工場で、ある印刷が終わるのを待っていた。植字工が印刷を背負っていた時代である。校正が終わって、印刷が始まると、植字工は、組まれた活字を、完璧なまで崩してしまうという儀式がある。印刷物の内容を人目に触れさせないためである。ラジオには、時の総理の犯罪のニュースが流れていた。

そのような時を経て電子図書の時代に変化する入り口に、われわれは立っている。予想以上の速さで進むであろうことは、容易に予測できる。

私が、恐れるのは、新聞の購読者数が減少しつつあるように、書籍もデジタルのものしか読まない方向に進むことである。すべてをディスプレイ上で操作し、印刷本が忘れ去られる時代がやってくることである。

荒井正吾

Contents

● 巻頭言 本の未来	1
● 調査相談カウンターから	2
● 司書の見方・味方・ミカタ「図書展示ができるまで」	4
● 奈良のもの・ひと⑧「本居宣長の和紀行」	6
● 地域資料から「片桐且元の子孫と片桐家代々記録」	8
● お知らせと事業紹介	9
● イベント掲示板	10
● 所蔵資料紹介	12



まほとろば
Maho and Roba

調査相談カウンターから

“レファレンス・サービス”という言葉を目にされたことはありますでしょうか。『図書館用語集』ではこれを、「情報を求めている利用者に対して図書館が提供する人的援助で、情報そのもの、または情報が含まれる情報源を提示・提供すること。貸出と並んで図書館の利用サービスの中心となる業務」としています。現在多くの図書館でレファレンス・サービスが展開されており、「調べたいことがあるけれど、どのようにすればいいかわからない」といった利用者の方が相談できる窓口を設けています。館によって名称は異なりますが、図書情報館では、3階に「調査・相談カウンター」として2席用意しています。



質問① 千利休の「百ヶ条」が載っている文献を探しているのですが、こちらにありますか？

質問者によりますと、「百ヶ条」は茶道の心得などが記されているものらしいのですが、これが正式な名称かどうかはわからないとのことでした。

調べものをする際、何らかの手がかりを得るためにまずインターネットで検索することが多いのですが、千利休ほど著名な人物であれば個人の事典が刊行されていますし、茶道辞典などにも記載がありますので、当館が所蔵する『利休大事典』から調べることにしました。

索引を確認すると、「百ヶ条」はなかったものの同じ「百」の字を含む「利休百首」という項目があり、それは利休が和歌に託して茶の湯の教えを示したとされるもので『千利休全集』に収録されていること、『茶道教諭百首歌』という題名を持つ^{ひんげん}玄々斎(裏千家十一代)による写本もあることが記されていました。内容的にもお探しのものと合致するようでしたので、当館がこれらの文献を所蔵しているかを蔵書検索システムOPACにより確認しましたが、いずれもヒットしませんでした。

そこで、『千利休全集』以外に収録されている文献がないかを調べることにします。全集などの収録内容を調べる際に用いるツールは対象となる文献により異なりますが、今回はオンラインデータベース「NICHIGAI-WEB BOOKPLUS」(*)を使用しました。

検索の結果、『茶道古典全集第10巻』にも「茶道教諭百首詠」として収録されていることがわかり、幸い当館にも所蔵がありましたので、現物を提供することができました。

この文献の解題によりますと、「利休百首」の名でも知られる「茶道教諭百首詠」は、利休の歌として伝えられていたものを後世の人士が集めたもので、茶道人の教養として必要とされる茶道精神や作法を説く意図をもって編集されたようです。

質問者は百首の一部を控えたメモをお持ちで、当該部分を確認されたところ、お探しのものと一致しました。



NICHIGAI-WEB BOOKPLUS

【参考文献】

- 千宗左ほか監修『利休大事典』 淡交社 1989年
 - 千宗室ほか編『茶道古典全集 10』 淡交新社 1961年
 - 日本図書館協会用語委員会編『図書館用語集』 日本図書館協会 2013年
 - 図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』 柏書房 2004年
- ※NICHIGAI-WEB BOOKPLUS：1926年（昭和元年）以降の図書約400万件の情報が収録されています。

(徳山 さおり)

続いては、当館が所蔵する奈良県関係資料が役立つ例です。

質問② 奈良県知事公舎について調べているのですが、**①**いつ誰が建てたのかわかりますか？
②ここで昭和天皇が平和条約を認証したことについて書いている文献はありますか？

奈良公園で観光ガイドをされている方からのご質問です。知事公舎は吉城園・依水園をはじめ趣ある佇まいの町並みにある建造物で、奈良公園のエントランスともいえる場所に位置しており、観光者からよく質問を受けるそうです。また、奈良県が観光地としての魅力を高めるために知事公舎を含む吉城園周辺エリアの整備を計画しているので、改めて調べ直したいということでした。

まず**①**について。はじめに当館の蔵書検索システム OPAC から、『明治二十三年起 官舎（知事・警部長）一件』という公文書綴りを見つけました。この中には、現知事公舎の土地建物を買収して官舎にするための内務省への認可申請、買受申請文書や内務省指令秘乙第 90 号文書（右写真）があり、宅地 975 坪及び建物 110 坪を個人から 4089 円 90 銭で買い上げたことがわかります。また、奈良県警部長の官舎用地として隣地 444 坪を買い上げた文書もあり、「将来是非公園へ編入セサルヲ得サル場所」と書かれています。『奈良市史 通史 4』によると、同年に奈良公園特別経済が予算化され、公園の改良整備が論議され始めたとのことでした。



内務省指令秘乙第 90 号文書

続いて、奈良の近代建築に関する論文をオンラインデータベース「CiNii Articles」(※)で検索しますと、「奈良県の近代和風建築とその設計者（黒坂貴裕著『奈良文化財研究所紀要』2010）」がヒットしました。ここには、「奈良県における近代建築の特徴は、和風建築への偏重という点がまず指摘できる。これについては、国家創成の地、つまり和風の原点という意識とともに、明治 30 年に施行された古社寺保存法にともなう古社寺修理によるところが大きい（中略）奈良を拠点として活躍した建築家としては、岩崎平太郎と大木吉太郎を挙げることができる」と論じられています。そこで当館が所蔵する『近代奈良の建築家岩崎平太郎の仕事：武田五一・亀岡末吉とともに（川島智生著 2011）』を確認しますと、「現建築は、奈良県知事公舎として大正 11 年 3 月に建設されたと伝えられる」とありました。岩崎家から「知事官舎」と記された別注の照明器具の図面が 5 葉発見されており、岩崎の師の武田五一が大正初期より奈良県古社寺修復関連の技師をつとめていたことから、そのラインで設計依頼がなされたとも考えられるということです。なお、岩崎も昭和 6（1931）年に奈良県の土木工手となっています。



御認証の間（奈良県知事公舎内）

次に**②**について。昭和 26（1951）年 11 月 19 日、昭和天皇は奈良県知事公舎で平和条約の批准書に署名しました。これは、同年 9 月にサンフランシスコで開かれた連合国側との講和会議において日本政府が調印した対日講和条約と、同時に結ばれた日米安全保障条約の批准書を、視察旅行で奈良を訪れていた昭和天皇が認証したものです。

このことは、新聞『大和タイムス』昭和 26（1951）年 11 月 20 日付の一面で、「知事公舎で歴史的認証 批准書に『裕仁』と署名 両条約の国内手続き終わる 後に『奈良で』と記入」という見出しで報じられています。『大和タイムス』は現在の奈良新聞で、当館ではマイクロフィルムで閲覧していただくことができます。

【参考文献】

- 庶務課 『明治二十三年起 官舎（知事・警部長）一件』（奈良県庁文書）1891 年
- 奈良市編纂 『奈良市史 通史 4』 奈良市 1995 年
- 奈良公園史編集委員会編集 『奈良公園史』 奈良県 1982 年
- 黒坂貴裕 「奈良県の近代和風建築とその設計者」（『奈良文化財研究所紀要』2010 年）
- 川島智生著 『近代奈良の建築家岩崎平太郎の仕事：武田五一・亀岡末吉とともに』 淡交社 2011 年
- 『大和タイムス』 昭和 26 年 11 月 20 日

※CiNii Articles：約1,700万の学術論文情報を収録する国立情報学研究所(NII)のデータベース・サービスです。



（片山 智加子）

司書の見方・味方・ミカタ



図書展示ができるまで ～図書を通して知の世界が広がるように～



当館では、常にいくつかの図書展示を実施しています。特にテーマ展示は、2階情報資料スペースでは月替わりで、3階ブリッジでは2ヶ月ごとにそれぞれテーマを替えて、当館が所蔵する300冊前後の図書をご覧いただいています。図書展示は、来館していただいた方の知的好奇心を刺激することや興味の幅を広げることを目指して、企画から設営まで司書職員が行っています。今回は、その制作過程をご紹介します。

テーマ決定

毎年1月ごろに、次年度(4月～3月)分のテーマを決めます。魅力のあるテーマか、社会的関心が持たれている内容か、展示に必要な関連図書は十分所蔵しているか、などの観点から、司書職員が案を出し合います。時事性を考慮し、県内外や当館で開催するイベントとの関連にも注意しながら、テーマと展示時期を確定します。

展示概要

テーマが決まったら、いろいろな切り口があるので、どのような構成の展示にするかを担当職員が考えます。たとえば「旅」というテーマなら、旅を扱った文学作品を中心に、あるいは奈良の古道・街道や観光を軸にするなどが考えられます。テーマの核が異なれば展示構成も大きく変わりますので、展示を通して何を伝えたいのか、ここでコンセプトをしっかり定めます。

協力依頼

展示の内容を深めるため、テーマに関係する県の部署・大学・民間機関などに協力を依頼しています。所蔵する図書の紹介だけでなくさまざまな情報を紹介することで、見ていただく方の理解が深まり、調査・研究に役立てていただけます。

また、図書以外の現物展示や関連イベント情報を加えるなど、より楽しく身近に感じていただける展示を心がけています。



ファッションをテーマにした展示では、県立民俗博物館より昭和中期の花嫁衣装をお借りしました。

こんな協力をしていただいたことも…

関連イベント

展示は、当館で開催するイベントの内容に合わせて行うこともあります。

たとえば昨年8月には、(一財)氷室神社文化興隆財団と共催した公開講座「なら氷室神社創建の謎」とその関連イベント「スズカゼノイチ」「コオリノセカイ」にあわせ、「夏の涼を愉しむ」と題し、涼をとる工夫や夏の風物詩に関する図書を展示しました。

館内に設置した氷柱やかき氷の出店は図書展示の内容を立体化したもので、イベントとの相乗効果でより多くの方にご来館いただくという試みです。





図書選定

図書展示は、図書や雑誌だけでなく普段目に触れる機会の少ない古文書や絵図・地図なども見ていただける場です。右写真のように見出しや説明文も作成します。また、展示前には汚損などの状態を確認し、必要に応じてクリーニングや修理を施します。



発表準備

展示をお知らせするポスターや、配布用の展示リストを印刷します。また、当館のホームページやイベント案内チラシにも掲載しますので、システムや企画担当職員との連携も不可欠です。

報道発表

展示の1週間前までに、開催のお知らせを県の報道機関へ発表します。発表内容は、奈良県庁ホームページの新着情報でご覧いただけます。また、テレビや新聞などで紹介していただくこともあります。記者のインタビューには、展示を担当した職員がお答えします。

展示設営

いよいよ図書を並べます。休館日や閉館後にそれまでの展示を撤収し、新しい展示を設営します。図書を手に取っていただきやすいよう並べることはもちろん、諸機関から提供していただいた展示物も効果的に見えるように工夫します。

展示の 利活用

図書展示では、普段別々の場所にある図書などをまとめてご覧いただけます。また展示リストは、そのテーマについて知りたいときの調べ物リストとして、その後も活用していただけますし、他の図書館で図書収集の参考にさせていただくこともあります。さらに、展示した図書を「テーマセット」として、県内の市町村立図書館や学校図書室に貸し出ししたりもしています。



ここまで図書展示の制作過程をご紹介しました。各展示の準備は1ヶ月以上かけて行います。見ていただく方の期待に応えられるよう、また驚きと発見につながる図書との出会いを願って企画しています。これから、もみなさんの知の世界が広がるような、そして楽しんでいただける展示を企画いたしますので、ぜひお立ち寄りください。

(川村 殉子・辰巳 理紗)

本居宣長の和紀行 ～『菅笠日記(すががきののつき)』より

〈本居宣長〉

本居宣長は、享保15(1730)年に伊勢国飯高郡松坂町(現三重県松阪市)で生まれました。医者になるため若くして京都に遊学した後、松坂にて医業の傍ら源氏物語などを研究し、「もののははれ」を主眼においた文学説や、上代の精神を理想とする古道説を追究する研究に努めました。また、賀茂真淵に弟子入りしてからは古事記の研究に主眼を置き、35年を費やして『古事記伝』を完成させました。そのほか和歌の研究も手掛け、『新古今和歌集』を理想とする歌論を展開します。宣長は、我が国の文学研究や国学思想に多大な業績を残した人物であったといえます。



吉野水分神社

〈本居宣長と吉野〉

『家のむかし物語』によると、宣長の父三四右衛門定利は男子が授かるよう吉野水分神社に祈りました。そして子が13歳になったら一緒にお礼参りをすると願を立てたところ、程なくして宣長が生まれました。残念ながら定利は宣長が11歳の時に亡くなりますが、13歳になった宣長は願掛けに従って吉野水分神社へお礼参りを果たしました。宣長は生涯に3度吉野を訪れていますが、必ず自らの出生に深い関わりのある吉野水分神社へ参詣しています。



後醍醐天皇 塔尾陵

〈『菅笠日記』からよむ和紀行〉

『菅笠日記』は、明和9(1772)年3月5日から10日間の旅行を記録したものです。冒頭に「吉野の花見にと思ひたつ」と書かれているように吉野への花見が目的でしたが、大和の山稜や故事旧跡を探索するなど、『古事記伝』執筆のための調査旅行でもありました。

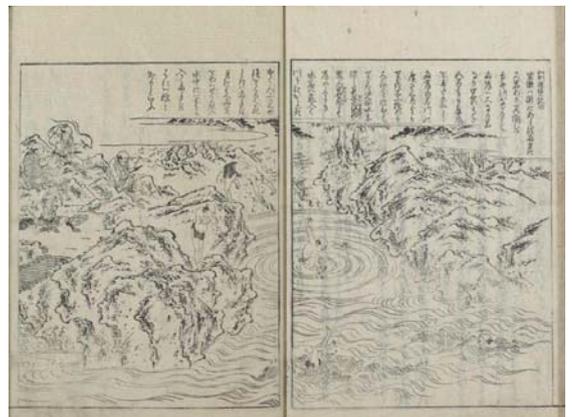
大和へは萩原(現榛原)から入り、長谷寺・多武峰に参詣したのち、吉野に向かいました。出立の当日から雨に見舞われ、桜を心配しながらの旅路でしたが、吉野に着く頃には天気も回復し、一目千本とも言われる桜を堪能したようで、桜

を詠んだ和歌を何首も残しています。また興味は南朝旧跡にも向けられ、後醍醐天皇の陵墓や皇居跡を訪れてはその悲哀を和歌に詠んでいます。

この旅ではさらに吉野の奥にまで足を運び、蜻蛉の滝や宮滝を訪れました。宮滝で「岩飛び」を見学した際には、淵に飛び込む様子に肝をつぶしてしまったようです。

吉野に2泊した一行は、壺阪寺から飛鳥・橿原方面に向かい、記紀ゆかりの地を訪ねます。そして地名や陵墓について里人に尋ねまわり、自説と突き合わせて考察をおこないました。ただし必ずしも正確な答えが返ってくるわけではなく、たとえば文武天皇陵を武烈天皇の御陵であると答える里人の言に、まったく頼りにならないとこぼしています(この時宣長が文武御陵としているのは、現在の高松塚古墳のことです)。

そのほか川原寺跡や岡寺、飛鳥寺も訪れ、礎石の様子や飛鳥大仏のことを書き残しています。さらに酒船石を見学しますが、さすがの宣長も何のために作られたものか分からなかったようです。



宮瀧の岩飛びの様子



文武天皇陵

宣長は畝傍山にも登る気でいたようですが、同行者たちの気が進まず、結局周辺の^{すいぜい}綏靖天皇御陵や神武天皇御陵を巡りました。宣長はその規模や形態を自分の目で確かめ、綏靖天皇御陵とされている方が神武天皇の御陵ではないかと文献も挙げて推定しています。

この後、同行者たちと当麻・龍田・奈良まで足を延ばそうかと相談しますが、帰郷を望む人がいたため、最後に大神神社に参詣して帰路につくことになりました。

飛鳥を後にした宣長は、安倍の文殊院を巡って大和三山・神武御陵へ向かいます。安倍の文殊院には3つの古墳があり、宣長は石室内を調べ、その構造などから高貴な人の墳墓であると類推しています。

大和三山の香具山は記紀研究者の憧れの地であり、宣長も喜び勇んで登ったようです。そんな心境を表してか、香具山で5首の和歌を詠んでいます。山頂には酒を飲む一団や蕨採りの人などがおり、その中の物知り^{ものしり}に遠望について聞き尋ね、畝傍・耳成山のほか二上山や生駒山まで見渡すことが出来たと記しています。



酒船石

10日間のうち8日ほどを大和国に費やし、宣長の旅は終わりました。文中には、里人のあやふやな言い伝えや観光地で見聞きした胡散臭い伝承に手厳しい評価を下している箇所が多々ありますが、これは宣長の学者然とした側面の表れではないかと思われま。とはいえ、日記の随所に記紀ゆかりの地に対する思慕の念が溢れ、感性豊かに詠む和歌を見る限り、彼にとってこの大和旅行が楽しいものであったことがうかがえます。旅行の成果は『古事記伝』の執筆に生かされたことでしょう。



安倍の文殊院西古墳



【参考文献】

- 本居宣長著『本居宣長全集第四』吉川半七 1902年
- 本居宣長記念館編『本居宣長事典』東京堂出版 2001年
- 城福勇著『本居宣長(人物叢書179)』吉川弘文館 1980年
- 本居宣長〔原著〕三嶋健男 宮村千素著『菅笠日記 現代語訳』和泉書院 1995年
- 渡辺清恵著『不可解な思想家本居宣長 その思想構造と「真心」』岩田書院 2011年
- 松野陽一 上野洋三校注『近世歌文集下(新日本古典文学大系68)』岩波書店 1997年

※文中の地名等は、『菅笠日記 現代語訳(和泉書院 1995年刊)』の表記になりました。



大和の杜から望む大和三山

(上田 裕介)

かたぎりかつもと

「片桐且元の子孫と片桐家代々記録」

片桐且元は豊臣家に仕えた武将で、大和国竜田藩の初代藩主です。藩は江戸時代前期に断絶しましたが、当館所蔵の文書群「片桐家代々記録」(以下「片桐記録」)から、且元の子孫が遠く尾張の地で存続したことを知ることができます。

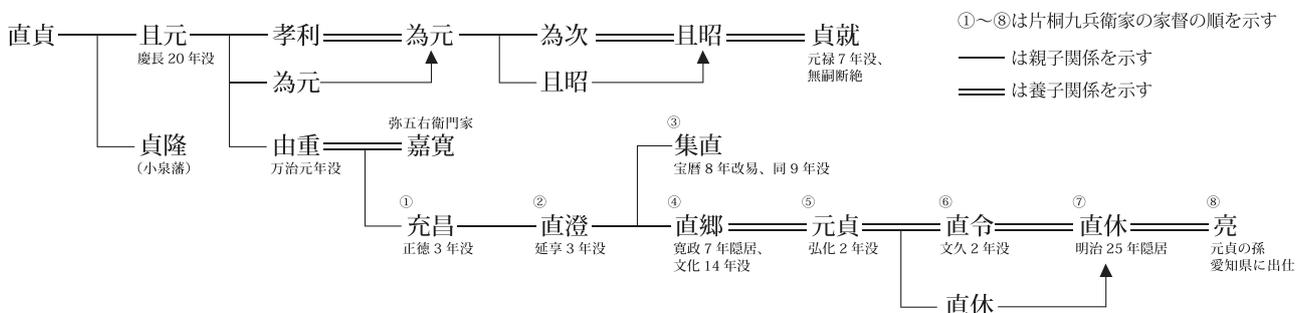
且元には何人かの子がいましたが、そのうち九兵衛由重が寛永21(1644)年に500石で尾張藩に仕官しました。その死後、片桐家は九兵衛家と弥五右衛門家に分かれます。「片桐記録」は、次男充昌から始まった九兵衛家が所蔵していた文書です。九兵衛家の屋敷は、江戸時代後期には名古屋城下の天津町(現名古屋市中区)にありました。敷地面積は約500坪で、本家(母屋)のほかに長屋と座敷がありました。建物はいずれも藁葺きで、床はほとんど板敷きか土間と記されており、当時の中級武士の屋敷の有り様が想像できます。

さて、九兵衛家は初代充昌の後を子の直澄が継ぎ、その後集直と続きますが、宝暦8(1758)年に改易されて存亡の危機に陥ります。この時は養子に出ていた集直の弟直郷が新たに召し出される形で跡を継ぎましたが、その後も後継者問題に悩まされました。直郷には男子がいたのですが、事情により弥五右衛門家を相続したため婿養子を取りました。しかしこの縁組は離縁になり、再び婿を探します。そして迎えられたのが、元貞でした。「片桐記録」には藩の規則などを記した文書も残されているのですが、多くはこの元貞の頃に作成されたものです。中には元貞の筆と思われる書き込みも見られ、職務に関する事柄を記した「控帳」では、本人のみならず同僚たちの様子までもがうかがえます。元貞は筆マメな性格だったのかもしれませんが。

九兵衛家はその後も養子による相続が続きますが、幕末に至るまで片桐且元の血筋を繋ぎ、明治維新後は愛知県の官吏として生きることになります。その歴史や家系は、「親類書」や「代々勤書」などによって判明しました。「親類書」は父母をはじめ親類の氏名を、「代々勤書」は片桐由重から明治20年代に至るまでの代々の職務歴を記したもので、これらは単に先祖や自身の事績を子孫に伝えるためだけのものではなく、藩庁に提出する文書でもありました。付箋や朱字で訂正を加えたものもあり、推敲を重ねながら提出用を作成していた様子が垣間見えます。

「片桐記録」には、片桐且元に関する史料「浅井長政 羽柴秀吉感状等」もあります。これは、且元とその父直貞が小谷城籠城戦や賤ヶ岳合戦の武功で得た感状3通の写しです。天和3(1683)年に幕府が大名・旗本に命じて古文書や系譜の写しを提出させた際、片桐本家提出分に上記3通も含まれていましたが、元禄7(1694)年の本家断絶後は散逸したと考えられます。現在、浅井長政感状の原本が石川武美記念図書館成實堂文庫所蔵の「片桐文書(旧小泉藩主家の文書)」にあることから、片桐本家の文書の中には同族の小泉藩主家に移ったものもあったとわかります。いつどこで筆写されたのかは不明ですが、「片桐記録」にこれらの写しが残されたという事実は、九兵衛家の人々が戦国時代の先祖に関心を寄せていたことを示しています。

片桐九兵衛家略系図 「片桐家代々記録」、『寛政重修諸家譜 第6』より作成



【参考文献】

- 内閣文庫『譜牒余録 下』国立公文書館内閣文庫 1975年
- 芥川龍男編『武家文書の研究と目録(上)』お茶の水図書館 1988年

(酒井 雅規)

お知らせと事業紹介

お知らせ「システム更新」

- ◆ 平成27年10月28日、5年ぶりに館内設置の情報機器(パソコンやプリンター等)を更新しました。PC利用席のパソコンは、2階に22台のMacintosh(OS X Yosemite)と6台のWindows(OS 8.1)を、3階に24台のWindows(OS 8.1)を設置しました。なお、合計設置台数は更新前と同じです。

利用については、従来はパソコン1台につき2時間までだったのを、土・日・祝日や夏季等の繁忙期に限り、台数に関係なく1日2時間の制限としました。

今回の更新では、Adobe社のライセンス認証形態の変更が影響して、セミナールーム、アトリエ、オーサリングルームに設置のパソコンで同社のソフトウェア(Photoshop等)が利用できなくなりましたので、対応策としてオーサリングルームではUSBケーブルを介して大判プリンター(EPSON PX-H9000)にデータ出力できる環境を整えました。したがって、前記ソフトウェアがインストールされているノートパソコンをお持ちいただければ、従来通りの出力(印刷)ができます。



- ◆ 平成27年12月15日に、国立国会図書館のデジタルコレクションを利用していただけるようになりました。アトリエには「歴史的音源*1」の配信を受けるための専用パソコン(Windows)を1台、3階調査相談カウンター横には、「図書館向けデジタル化資料送信サービス*2」を受けるための閲覧専用パソコン(Macintosh)を1台設置しました。

*1 1900年初頭～1950年頃のSP盤等のデジタル化音源。国内で製造された、音楽や演説など様々なジャンルのデジタル化音源をインターネット上で楽しみいただけます。

*2 国立国会図書館がデジタル化した資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料について、国立国会図書館の承認を受けた図書館において画像閲覧等ができるようになるサービスです。



(植村 和彦)

図書館の事業紹介

「市町村支援サービス」



当館は、県内の各市町村に窓口を1カ所設け、毎週定期的に搬送便を行き来させています。この便では、窓口と当館との間でお互いの利用者からリクエストのあった図書をやりとりしているほか、当館で借りられた図書の遠隔地返却にもご利用いただいています。

さらに、当館のさまざまな図書展示を元にしたセットの貸出も行っています。窓口はおもに図書館ですが、役場や公民館の場合もあります。

また、図書館が設置されていない自治体の小中学校図書室や小規模図書館等を対象に、読書支援として子ども読書セットを貸出しています。

レファレンス(調査相談)サービスにおいては、市町村立図書館から依頼のあった調査に対応し、時には当館の調査に協力を仰ぎながら、利用者の課題解決を進めています。

そのほか、市町村立図書館からの図書購入リクエストに応えたり、県内図書館職員向けの研修会等も実施しています。

このようにして、当館は県立図書館として「奈良モデル」の実現をめざし、市町村立図書館等と連携しながら、直接的・間接的に県域全体へのサービス提供に努めています。

(安井 敬子)

開館10周年記念イベント・展示を開催しました。

奈良県立図書館開館10周年記念コンサート
CONCERT TOUR IN JAPAN
for Christian Delamaine & Christian Chamorel in 2015
デラフォンテーヌ & シャモレル
ジャパン・ツアー 2015
in 奈良県立図書館情報館
 スイス フルート&ピアノデュオ・コンサート
 Swiss flute and piano duo concert
2015.10.29 (Thu.) 開演 18:00 (開場 17:00)
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
 後援：ナリスタファン・デラフォンテーヌ（フルート）
 クリスティアン・シャモレル（ピアノ）

奈良県立図書館開館10周年記念コンサート
はるかなるとき
吉桑道子ソプラノコンサート&大草原の風コンサート
11/3 (日) 開演 14:00 (開場 13:00)
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
【第1部】吉桑道子ソプラノコンサート 14:00～14:40
 歌：吉桑道子（ソプラノ） 語り：千田稔（奈良県立図書館館長）
 作曲：ピエトロ・ヴェネツィアーノ / 菅原真理子
【第2部】大草原の風コンサート～ローラの小さな音楽会 15:10～15:50
 演奏・語り：大草原の風トリオ
 菅原真理子（ピアノ・作曲・編曲）、福山陽子（ヴァイオリン）、
 谷口由美子（構成・進行・朗読）
開演 17:00 to 18:00 (開場 16:00)
 演奏者：西尾 勉（ピアノ）
開演 10:00 to 18:00 (開演 16:00)
 演奏者：西尾 勉（ピアノ）

奈良県立図書館開館10周年記念イベント
11/3 (日) 開演 13:00 to 18:00 (開場 12:00)
奈良県立図書館開館10周年記念コンサート
「はるかなるとき」
開演 13:00 to 18:00 (開場 12:00)
奈良県立図書館開館10周年記念コンサート
「はるかなるとき」
開演 10:00 to 18:00 (開演 16:00)

奈良県立図書館開館10周年記念イベント
クロストーク&朗読会
2015.11.14 (Sat.) 14:00～16:00
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
【ゲスト】
 佐野史郎（俳優）、「はるかなるとき」の著者、小説家、藤本智士（編集者）、「りす写友会」のメンバー、
 西尾 勉（ピアノ）
2015.11.10 (Tue.)～11.29 (Sun.)
奈良県立図書館開館10周年記念
「ことほぐ(寿ぐ)」写真展
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
「ことほぐ(寿ぐ)」写真展
 2015.11.10 (Tue.)～11.29 (Sun.)

奈良県立図書館開館10周年記念
オーストリア文化フォーラムプレゼンツ
Klavierabend mit Anna Magdalena Kokits
アンナ・マグダレーナ・コーキッツ
ピアノリサイタル
2015.12.17 (Thu.)
開演 18:00 (開場 17:00)
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
 後援：オーストリア文化フォーラム（ピアノ）
 アンナ・マグダレーナ・コーキッツ（ピアノ）

奈良を語る
自然への想いと恋、そして歌
2015.12.23 (水)
開演 13:30 (開場 12:30)
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
ゲスト：山口佳恵子（ソプラノ歌手）
上村淳之（日本画家）
進行・解読：千田稔（当館館長）
演奏：山口佳恵子（ソプラノ歌手）
山田剛史（ピアノ）
～風にのって～
～トート「奈良を語る」～
2015.12.23 (水)
開演 16:30 (開場 15:30)
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
演奏者：岡田由美子（ソプラノ歌手）
千田稔（当館館長）
玉井幸子（ピアノ）

奈良県立図書館開館10周年記念イベント
奈良を歌う
作者への想い、そしてあくがれ
2015.12.23 (水)
開演 16:30 (開場 15:30)
 会場：奈良県立図書館情報館 2F メインエントランス
演奏者：岡田由美子（ソプラノ歌手）
千田稔（当館館長）
玉井幸子（ピアノ）

「図書館でわかる+地元でできる」
医療と健康を考えるトークセッション
2016年2月7日 (日)
14:00～15:30 (開場 13:00)
 会場：奈良県立図書館情報館 1F 交流ホール
講師：西尾 功
国分清和
梅林聡介
瀬川雅教

■デラフォンテーヌ&シャモレル ジャパン・ツアー 2015 in 奈良県立図書館情報館/10月29日(木) 18:00~/演奏:クリスティアン・デラフォンテーヌ(フルート)、クリスティアン・シャモレル(ピアノ)/後援:在日スイス大使館 ■はるかなるとき~吉桑道子ソプラノコンサート&大草原の風コンサート/11月1日(日) 14:00~/【第1部】吉桑道子ソプラノコンサート 14:00~14:40/歌:吉桑道子(ソプラノ)、語り:千田稔(当館館長)、ピアノ:菅原真理子、作曲:菅原真理子/【第2部】大草原の風コンサート~ローラの小さな音楽会 15:10~15:50/演奏・語り:大草原の風トリオ、菅原真理子(ピアノ・作曲・編曲)、福山陽子(ヴァイオリン)、谷口由美子(構成・進行・朗読) ■開館10周年記念トークイベント/11月3日(火・祝) 13:00~/ゲスト:松本紘(理化学研究所理事)、紺野美沙子(女優)、荒井正吾(奈良県知事)、千田稔(当館館長) ■開館10周年記念コンサート/11月3日(火・祝) 17:00~/演奏:西谷牧人(チェロ)、伊東裕(チェロ) ■開館10周年記念「ほんなら図書館!マルシェ」/11月3日(火・祝) 10:00~16:00 ■佐野史郎・柴崎友香クロストーク&朗読会と「ことほぐ(寿ぐ)」写真展《クロストーク&朗読会》/11月14日(土) 14:00~/ゲスト:佐野史郎(俳優)、柴崎友香(小説家)、藤本智士(編集者)、「りす写友会」のメンバー/《開館10周年記念写真展「ことほぐ(寿ぐ)」》/11月10日(火)~29日(日) ■オーストリア文化フォーラムプレゼンツ アンナ・マグダレーナ・コーキッツ ピアノリサイタル/12月17日(木) 18:00~/協力:オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム ■奈良を語る~自然への想いと恋、そして歌/12月23日(水) 13:30~/ゲスト:山口佳恵子(ソプラノ歌手)、上村淳之(日本画家)/進行・解説:千田稔(当館館長)/演奏:山口佳恵子、山本剛史(ピアノ)/共催:奈良県立図書館開館10周年を祝う記念事業の会 ■奈良を歌う~作者への想い、そしてあくがれ/12月23日(水) 16:30~/歌と語り:岡田由美子(ソプラノ歌手)/進行・解説:千田稔(当館館長)/演奏:岡田由美子、玉井幸子(ピアノ)/共催:奈良県立図書館開館10周年を祝う記念事業の会 ■「図書館でわかる+地元でできる」医療と健康を考えるトークセッション/2月7日(日) 14:00~/講師:西尾功(西尾外科医院院長)、国分清和(医療法人清和会理事長、国分医院院長)、梅林聡介(奈良市自治連合会会長、大安寺西地区自治連合会会長)/コーディネーター:瀬川雅教(社会福祉法人 恩賜財団 済生会奈良病院院長) 共催:奈良県立図書館開館10周年を祝う記念事業の会

所蔵資料紹介 『大和国絵図』元禄12(1699)年



今年、当館の貴重書庫内に収蔵保管している『大和国絵図』が、奈良県の有形文化財指定を受けました。平成21(2009)年に指定された『明治・大正期奈良県行政文書』に続く2件目となります。

江戸幕府は、行政用地図の「国絵図」と土地台帳の「郷帳」を諸大名に命じて作成・提出させました。この事業は慶長9(1604)年に始まり、正保・元禄・天保年間に改訂されたため、それぞれ慶長国絵図;正保国絵図;元禄国絵図;天保国絵図と呼ばれます。

当館の国絵図は、郡山藩主の本多忠常と高取藩主の植村家敬が絵図元となって元禄12(1699)年に作成したものです。草稿本ではありますが、元禄以前の官撰国絵図が現存していないことから、高い価値を認められています。縦586cm、横389cmと大きな絵図ですが、平成10(1998)年には奈良県立民俗博物館で特別陳列されました。

本図は、1里6寸の縮尺で大和国を1鋪に描いています。郡境には太い墨黒の線を引き、郡内には色分けした楕円に村名と石高を記し、主要道と脇道、山の高低などを線の太さと色の濃淡で表しています。峠の名前などを記した短冊も随所に見られ、加筆修正した様子がうかがえます。

また、山々の杉や松、吉野山の千本桜、大峰山系の荒々しい岩肌などの描写は、絵画としての美しさも持ち合わせています。

外題には「元禄之度御改正 天保七年丙申五月修復之」とあり、図中の「大和国高都合并郡色分目録」には15郡の色分け・郡高・村数と大和国全体の国高・村数が記され、最後に「元禄十式己卯年本多能登守 植村右衛門佐」と調進を担当した二人の名で締めくくられています。

奈良県の歴史を知るうえで貴重なこの絵図を後世に残すべく、適切に保存していきたいと考えています。



「大和国絵図」の一部

(松村 順子)

【参考文献】

- 川村博忠 『国絵図』吉川弘文館 1990年
- 磯永和貴 「江戸幕府撰大和国絵図の現存状況と管見した図の性格について」(奈良県立民俗博物館『奈良県立民俗博物館研究紀要』第16号) 1999年
- 大宮守人 「特別陳列「江戸幕府撰元禄十二年大和国絵図」についてーその展示と写真収録ー」(奈良県立民俗博物館『奈良県立民俗博物館研究紀要』第16号) 1999年

編集後記



平成27年11月3日に、奈良県立図書情報館は開館10周年を迎えました。

この節目の年を記念して諸行事を多彩に催すとともに、記念誌の発行やマスコットキャラクターの作製など、これまでの10年を振り返るとともに今後の展望を模索する始業の年でもありました。

本誌もこの機会に編集方針を変え、記事のテーマや内容を再検討し、標題や誌面も新しくすることで「より親しまれる図書館」を目指す館の姿勢を感じ取っていただけるよう心掛けました。

今後も、皆様に当館の確実な歩みをお伝えする館報を目指して参りたいと思います。

奈良県立図書情報館報 芸亭

(うんてい復刊) 第8号

発行日 平成28年3月31日

発行人 千田 稔

発行所 奈良県立図書情報館

〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000

TEL.0742-34-2111 FAX.0742-34-2777